

「恩寵クラブ」

主任司祭 晴佐久 昌英

「恩寵」という言葉がある。本来は君主から与えられる恵みを表す言葉だが、ギリシャ語のカリスの訳として、かつては文語聖書などで用いられていた。カリスとは神から人に与えられる無条件の愛、無償の恩恵のこと。現在は普通に「恵み」と訳されることが多いが、神からの一方的で圧倒的な恵みという聖性を香らせる「恩寵」を死語にするのは、いかにも惜しい。

イエスが「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせる」と語ったように、恩寵はよく太陽の光に例えられてきた。なるほど一方的で圧倒的で、こちらからは何のお返しもできないにも関わらず、どんな条件も問わずに全ての人に注がれる恵みとしてはこれにまさる類比はない。確かに私は罪人であるが、一方的に恩寵を頂いて、ここに在る。確かにあなたも悪人であるが、圧倒的な恩寵に生かされて、そこに在る。太陽の恵みを拒否した生物は決して生きていけない。今の日本で中高年が自らを殺し、若者が他者を殺す理由は、恩寵を知らないからではないか。

何もかも人間中心である現代社会にあって、教会は今こそ恩寵への信仰を新たにし、全ての人々が恩寵のうちにあると宣一言する必要がある。にも関わらず、いつの間にか教会の中にさえ人間中心主義が忍び込み、人間の知恵と力を第一にしてしまっていないか。人間が回心の努力をし、愛し合い許し合う工夫を重ねるのは当然だが、それらもすべて恩寵の助けあればこそ。子どもころの公教要理ではそのような恵みを「助力の恩恵」と呼び、謙遜な祈りと秘跡のうちに宿ると教えられたものだ。

パリに滞在中、信徒のために週に一度の信仰講話をする機会を頂いた。みんな熱心に集ってくれたので、毎回のように恩寵を祈り、恩寵について分かち合った。海外生活という困難と無力感の中にあっても、恩寵への信頼を第一にすれば、神は必ず救ってくださる。そんな信頼を込めて、集いの名も「恩寵クラブ」とした。

全ての人々は、人間の業ではなく無償で無条件の恩寵によって救われる。人がその恩寵を信じ、その恩寵を告げることこそ恩寵の実りなのだ。全世界が、恩寵クラブになるべきである。